

取材先	木暮実千代の会		
企画名	「演劇と映画の会」		
備考			
取材日	2024年10月14日(月) [13:00~15:30]	取材地	下関市民会館中ホール

レポート

関門トンネルは構想の域を出ず、本土と九州を跨ぐ関門橋が夢のまた夢であった時代、下関市は赤間関市と呼ばれ、下関駅は馬関駅と称していた。大陸や九州に向かう人は馬関駅で下車、ある人は海峡の女王と呼ばれた関門連絡船で九州へ、ある人は最新鋭の関釜連絡船で大陸に向かった。馬関駅に向かって右手には、国鉄直営の山陽ホテルがそびえ、西の玄関口として宮家や軍人、財界人、芸術家を出迎えた。そんな文化と芸術のカオスと化した喧噪の中、大正7年(1918年)1月、彦島福浦で一人の女の子が生まれた。「和田つま」後の木暮実千代である。

その木暮実千代の足跡を顕彰しているのが「木暮実千代の会」である。

第1部は創作劇「毎日が本番」 唐戸のグランドホテルの一角にあった下関警察署唐戸派出所であった実話である。友人と2人で通りかかった木暮実千代に警察官が声を掛けると、気軽に立ち寄り一緒に時を過ごし、頼みに応じてその場でサインをした。その言葉が「毎日が本番」である。

木暮実千代の気さくな人柄が偲ばれるエピソードである。また最後に当時の派出所勤務の方が登壇され観客席は沸いた。

第2部は映画「福浦町のオトンピン」 「オトンピン」とは、当時の下関或いは彦島で使われていた方言で、「男勝り」「勝気な女の子」を指す言葉である。幼少期の「和田つま」はまさにこの言葉の通りのオトンピンぶりを発揮していたのであろう。今回はこのエピソードを劇団Zing♪Zingの子供たちが演じた。作・演出は、木暮実千代の会の石原忠織氏 田中絹代と木暮実千代という稀代の女優が生まれ育った街 下関。その木暮実千代の全盛期を知る石原氏が、その名前すら知らない子供たちに伝える木暮実千代像。演じた子供たちにはどう映ったのであろうか。

関門トンネルが開通し、関門橋が姿を現し、第2関門橋の構想が現実化している今、石原氏から未来の子供たちに伝える懸け橋は、確実に届いたに違いないと感じた。

状況写真



木暮実千代の会 石原忠織氏



創作劇「毎日が本番」



映画「福浦町のオトンピン」



劇団Zing♪Zingの子供たち